

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 113号

2017年 9月

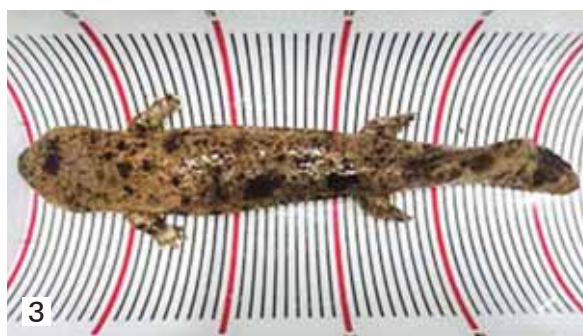
オオサンショウウオが1年弱で7cmも成長

オオサンショウウオは大山椒魚ですから、大きくなるのが特徴で、150cmくらいまで成長した記録が数例あります。これだけ大きくなるわけですから、ぐんぐんと成長するかというところでもなく、野外では年1cmも大きくなれば良い方、小さくなることもままあります。ところが、一昨年（2015年）の6月17日に、伊賀市ゆめが丘の外れにある調整池の水路で発見され（写真-1）、日本サンショウウオセンターに緊急保護されたオオサンショウウオが驚愕の成長をしたので紹介します。

このオオサンショウウオは発見時には全長48cm、体重780gでしたが（同2）、死亡した2016年5月25日にはそれぞれ55cm、1300gになっていました（同3）。保護されてから1年弱のあいだに、全長は7cm伸び、体重は倍近くなっています。餌はアジやエビ、鳥の砂肝や活ドジョウを7～10日に一度与えており、とくに頻りに給餌したわけではありません。この成長速度は飼育下でも異例といえ、なぜなのかは不明ですが、時として急成長することもあるようです。



写真-1 発見地点。上流は田んぼのなかの水路を流れてため池へ、下流は調整池につながっており、隠れる場所もなく、また餌も少ないためオオサンショウウオの生息には適していない、なぜここにいたのか不明であるが、放された可能性もあるので保護した。2 発見時のオオサンショウウオ、タモの直径は51cm。3 死亡時のオオサンショウウオ、計測器の一目盛りは1cm。なお、死因は不明。



〈清水 善吉：松阪市日丘町1386-17・江川 紫：日本サンショウウオセンター〉

イシガメの求愛行動

清水 善吉

春、日差しに暖かみを感じられる頃、カメ達が陽光を求めて甲羅干しをしている姿を見かけるようになります。つらい冬をじっと水中で耐えて、本格的な春を待ちかねるように活動を再開するものと思っていましたが、どうもそうではなさそうです。

本誌でも何度か紹介した私の「趣味の川歩き」は、夜間だけではなく日中にも行うことがあります。ハンザキ幼生の分散期である1～2月に川を遡上しながら、川底に溜まっている落ち葉をひたすらすくい上げて、なかに潜んでいる5cmほどの幼生を探します。夜中の川に入る人もそうそうはいませんが、厳冬期の川遊びも特殊な部類の行為でしょう。レアであるが故に珍しい出来事に遭遇することもあり、今回はそのうちのひとつであるイシガメの求愛行動の観察を紹介します。



写真1 メスの生殖器付近をのぞき込むオス2匹



写真2 メスが逃げる？とオスは後を追う



写真3 メスが止まると再び生殖器付近をさぐるオス

2014年2月6日14時頃、伊賀市奥鹿野地内柏尾川上流でイシガメ3匹が活動しているのをみつけました。大型の個体はメスで、小型の2匹はオスと思われます。オスはメスの生殖器付近を執拗にのぞき込み(写真1)、それを嫌う(実際はわかりませんが)メスが逃げるとオスも追いかけます(写真2)。メスは時々立ち止まりますが、手足、首、尾を甲羅のなかに入れて“石”状態になり、その生殖器付近をオスのがのぞき込むことの繰り返しです。

図鑑(決定版 日本の両生爬虫類、内山ら2002、平凡社)をみると、オスは、メスを追尾しながら正面にまわると前肢で交互に水をかくような動きをし、メスが受け入れると素早く後ろにまわって交尾をするそうです。今回の観察では、オスがメスの正面に回り込むような動きは確認できず、追尾と生殖器付近をさぐる行為の繰り返しでした。もっとも、ハンザキ幼生調査に来ているわけですから、カメの観察は数分程度で切り上げてしまいましたので、図鑑にあるような行動や実際に交尾したのかも不明です。最後まで観察しなかったことが今となってはちょっと残念です。

観察地点は、スギ壮齢人工林内を流れる河川内の小滝下の浅い淵で、川幅は約2m、水深約50cm、川底には砂礫が堆積していました。上流に人家等が存在しないため水質は良好な状態で、観察時の気温は0.7℃、水温は2.9℃でした。

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17〉

アオバズクが津のお城公園でヒナを育てた

今堀聖史

6月中旬に「アオバズクがお城公園におよ、散歩のときお父さんが見つけたの」と連絡があり、探鳥グループの例会で観察に行きました。なんと公園入口の石段に近い桜の木、高所の枝や葉が繁る中にアオバズクのシルエットが見えました。名の通り青葉の中において木に化け、目だけはしっかり周囲を警戒し抱卵中の巣を見張っているようでした。「巣穴は遠くない場所にあるはず」と樹洞のある木を探すが見つかりませんでした。石段の横に太い松があり樹洞はあるが、高さは5mほどで車も人の往来も多い。「あそこしかないと思うんだけど」と言いつつ、一ヶ月後に孵化して餌運びをすると予想し、待つことにしました。

7月10日午前10時頃、2羽のアオバズクが桜と松の木に分かれて止まっていた。松の木にいる1羽はかなり目立つ場所に止まっていた、巣穴と思われる樹洞に顔を向けて警戒しているようすでした(写真1)。7月11日午後7時過ぎに行くと1羽は道路上の太い電線に止まっていた。道路から観察していると、日が落ちて薄暗くなった7時45分頃に2羽が一斉に飛び立ち、数分毎に給餌していました。人や車が通ってもあまり警戒することなく給餌し、時間の経過とともに給餌の間隔は長くなり、約1時間後にはほとんど給餌しなくなりました。

翌日から数日間、給餌のようすを見たいメンバーが思い思いに出かけ、「昼間とはちがったアオバズクの活発な動きが面白かった、夜行性ということが具体的にわかった」と、夜でも比較的明るい街中の公園でしかできない観察ができました(写真2)。7月20日頃に巣立った雛を見ることのできた数人の仲間は大喜びでしたが、数日後には高木の枝へ移動したようで見られなくなりました。

お城公園は、国道のバス停から津市役所やリージョンプラザへの近道で、散歩の人も多くて人通りが絶えません。また、公園内は樹木も多く和風庭園もあって草が生い茂っている場所もあります。夜は外灯が明るく虫たちがたくさん集まってアオバズクにとっては餌が捕りやすく、天敵の少ない繁殖場所だと思います。ただ、樹洞のある大木が少なく、今年利用した巣穴も再度使えるか分かりません。街中の公園に憩う人たちがこうした生き物を楽しみ親しむ環境作りにもっと意を注いでほしいとも思いました。これまでアオバズクを見てきた偕楽公園(津市)、廣幡神社(菟野町)、伊那部神社(東員町)でも同じような課題がありました。

さらに一つ幸運なことは、アオバズクの雛を目の前で見られたことでした。巣から落ちて保護されたアオバズクの雛が7月上旬に津市の獣医師・高橋松人さんの所に届けられ、給餌など毎日の世話をされて無事に育っており、秋には放鳥される予定です。餌をねだる雛の鳴き声が親鳥の鳴き声と違って秋の虫のようであることなど、野外観察では知ることのできない生態を観察できました。



写真1 日中、巣穴付近で警戒する親鳥



写真2 夜間、巣に餌を運んできた親鳥

〈いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30〉

鈴鹿市にてオオクボシダを確認

松 本 功

2017年7月17日、鈴鹿市小岐須町にある小岐須溪谷の林道を登山目的で歩きつつ、特に何も無いだろうな、と思いながらいつもの癖で、ラン科植物の気配を探して林道の法面を見ていました。すると、大杉谷でかつて見かけたものが目に留まりました。最初は他の種類のシダの幼体だろうと自分の目を疑いながらもよく見ると、間違いなくオオクボシダのようです。葉を裏返して念のためソーラス（孢子囊群）も確認しましたが、オオクボシダで間違い無いようです。写真を撮り、改めて周辺を調べてみました。それほど時間をかけることはできませんでしたが、約30mの範囲に10個体ほどを確認することができました。よく調べればもっと見つけることができるかもしれません。

帰宅後、これまで鈴鹿市でオオクボシダが確認されているかについて、いくつかの文献資料にあたってみました。記載を見つけることができませんでした。そこで、本会の山本和彦さん、そして山本さん経由で市川正人さんにオオクボシダの鈴鹿市での分布記録についてたずねたところ、三重大大学の演習林での記録が県内では北限のようである、との回答をいただきました。もちろん他の方がすでに確認されている可能性もありますが、これまで報告されたことも無いようなので、ここに記録を残しておこうと思い報告をさせていただきました。

別件ではありますが、本年は、菰野町の長石谷ではショウキラン、四日市市の宮妻峡ではツチアケビといった菌従属栄養（腐生）ランを観察することができました。そして、今回のオオクボシダを確認した際には別の谷で、小岐須では少なくなっと思っていたクモノスダやヤマシャクヤクの群落を確認しました。今更ながら、改めて鈴鹿の山の面白さに気づかされているところです。

最後になりましたが、オオクボシダの県内分布についてご教授いただきました山本和彦さん、市川正人さんにお礼申し上げます。



写真1 オオクボシダ，2017年7月17日，鈴鹿市小岐須町で撮影



写真2 写真1の個体の孢子囊群

〈まつもと いさお：四日市農芸高等学校〉

リュウビнтаイは松阪でも生育可能～温暖化!?

松阪市西郊にあるわが家の庭に1本のリュウビнтаイがあります。20年ほど前に、尾鷲市の林道工事現場で転がっていた小さな株（掌に包めるくらい）を持ち帰って植えたものです。県内では紀伊半島南部に産する常緑のシダですが、わが家では冬に葉は枯れてしまいます。春になると新芽を出し、梅雨頃には2mほどの高さになります。夏には孢子もつけますので、適地に飛んでいけば繁殖も可能なでしょう（写真1，2；8頁に掲載）。

〈清水善吉：松阪市日丘町1386-17〉

櫛田川のヒサウチソウ

篠木善重

今春、松阪市射和町の櫛田川堤防で、白い可憐な花を咲かせた草丈10~30cmほどの草本が群生しているのを見つけた(写真1, 2)。初めて見る花だった。唇形の花の上唇が薄紫色を帯び、山野草の人気種かと思わせるほどであった。それが何と外来種であったとは!

ヒサウチソウ *Bellardia trixago* は、地中海沿岸原産のゴマノハグサ科の越年草である(植村ら2010)。日本では1982年に名古屋市で初採集され、その翌年に三重県鈴鹿市の国道23号線で加田勝敏氏が見つけている(太田1997)。太田(1997)では本種の県内分布状況を帰化度1「まれに生育する」に区分し、鈴鹿市で発見されてから23年後の2006年の生育状況についても、太田・太田(2010)は23年前と変わらぬ帰化度1に区分している。

三重県の帰化植物を研究されていた太田久次さんは、2008年に亡くなられている。生前、ご自宅に何度か伺って、帰化植物の話をお聞きしたことがある。櫛田川のヒサウチソウについて、太田さんに報告できたなら、きっと喜んでいただけたことだろう。

本会会員の市川正人氏によると、本種は現在、四日市市の内部川など、県内の大きな河川堤防には広く分布しているとのことである。植村ら(2010)は、可憐で美しい植物であるが、一度侵入すると防除困難な害草であると認識すべきであると警告しているが、害草であっても可憐なヒサウチソウにまた会いたい。来春も、櫛田川の堤防へきっと出かけていこう。

末筆ながら、本種の近年の県内分布状況についてご教示いただいた市川正人氏に感謝する。

文献

- 植村修二ら. 2010. 日本帰化植物写真図鑑第2巻. 全国農村教育協会, 東京, 579p.
太田久次. 1997. 改訂三重県帰化植物誌. ムツミ企画, 津, 246p.
太田久次・太田久裕. 2010. 新版三重県帰化植物誌. ムツミ企画, 津, 316p.



写真1 ヒサウチソウ 2017.4.29



写真2 櫛田川堤防で群生するヒサウチソウ

〈しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1〉

清水千佳子 ネイチャーアート展V ~デッサン VS 彩色画

- 期間** 11月3日(金)~6日(月) 10時~18時, 最終日 17時
会場 ギャラリーMOS (松阪市中町1870 松本紙店2階, TEL 0598-21-0603)
内容 県内産動植物の博物画展. 期間中終日ライブアートを予定

わが家の愛犬コウベモグラを捕獲す

上田利彦・上田教子

2017年7月24日お昼過ぎ、わが家の愛犬ピンコが自分の小屋の下に首を突っ込んで騒いでいました。ピンコはウサギを狩る際に使われるビーグル犬なので、穴を掘ることが大好きです。犬小屋の周りは普段から掘り返され、常に小屋がかたいでしまっているのですが、今回、いつもの騒ぎようではなかったことからようすを見にいくと何やら啜えており、数回振り回したあと、小屋の中に隠そうとして



写真1 小屋の下にモグラを見つけた！



写真2 ピンコが捕まえたコウベモグラ



写真3 つぶらな瞳（眼）がなかなかかわいいです

ました(写真1)。そこで犬を引き離して確認したところ、そこには茶褐色のモグラがびくびくとすでに瀕死の状態で横たわっていました(写真2, 3)。

わが家は、旧久居市の郊外にあり、まわりは黒ぼく土の畑が広がっています。このため畑にはモグラが生息しており、ペットボトルで作った風車や超音波発信機を設置するなどしてモグラの坑道による農作物の枯死被害への対策を行っています。

しかし、今回愛犬が掘りだしたところは、わが家の裏庭であり、20年程前に表土を剥ぎ、隣の地盤より60cmほど高く山土を盛り固めて宅地にしています。また、隣の茶畑との境はコンクリートの擁壁で囲まれています。このため、構造的にはモグラが侵入するには地中からも地表からも距離が遠いと思われるところであり、何を頼りにモグラがここまで侵入してきたか疑問を持っています。

犬小屋の裏は雑木林と山野草を植えた庭で、10cmもない表土によりやくミミズが生息するなど生態系が豊かになってきたのは喜ばしい反面、モグラが家屋の基礎部分に坑道を掘ってやってきた!?!と考えると“厄介なことになったな?”と複雑な心境でもあります。清水善吉さんに確認してもらったところ、このモグラはコウベモグラであり、地中のみでなく地表を移動することもよくあるとのことでしたので、ちょっと安心しました。

さて、獲物を取り上げられたピンコは、その後小屋の周りを掘り返し続け、見つけたはずの獲物を探し回っていました。次は何を捕獲してくれるか楽しみです。

〈うえだ としひこ・うえだ きょうこ：津市久居一色町〉

標本データの記録について

中 優

当初の予定よりも遅れているが、三重県生物誌の編さんが着々と進んでいる。筆者は植物部門および貝類部門の著者および事務局としてこの作業にかかわっているが、その作業を通じて気のついた点について述べてみたいと思う。

1 標準和名

種によっては標準和名以外に別名（シノニム）を持つ種がある。ただ、どの和名を標準和名とするかは、標本のデータを記載する各人にゆだねられている。多くの場合、各人が拠り所とする基準（例えば図鑑や目録）に記載されている和名を標準和名としているのが一般的であるが、この拠り所が別の基準の場合は異なる結果となることは少なくない。今回のような生物誌の場合、標準和名は各人に共通し、かつ最新の知見を取り入れた基準によるものが望ましい。

2 学名

ご存知のように標準和名は日本だけで通用するものである。したがって、学名を併記することが必要で、最新の知見による学名であることは標準和名と同様である。また、命名者についても学名の履歴が分かるので併記することが望ましい。

3 地名

今回の編集作業で一番苦労したのがこの地名である。地名の記載は、市町村名、大字の2つの情報にすると全体会議で決められたのであるが、植物の最も古い標本記録は1901年であり、標本ラベルに記載された地名が現在までの間に変更された例は少なくない。最後の地名の変更は平成の大合併によるものであったが、この変更は単なる合併による表記の変更であったので特に問題になることはなかった。しかし、過去に実施された変更の中には当時の市町村間をまたぐ変更があり、現在の地名を特定することができず、生物誌では「旧〇〇村」等の表記とした場合もある。ただ、この例は過去の古いデータを整理しようとする場合には避けて通れないことである。

それよりも困ったのが、例えば「藤原岳」とだけしか記載されていないデータである。このデータから、想定される地名はいなべ市（以下省略）藤原町坂本、藤原町大貝戸、藤原町西野尻、北勢町別名、北勢町新町等があり、広範囲に及ぶ。場合によっては滋賀県の可能性もある。データの記録はより詳細にするにこしたことはない。

今後地名の記録にあたって希望するのは、例えば昭文社が出版している道路地図県別マップル等を参考にした現在の字名の記載である。これに具体的な地名、例えば〇〇神社、〇〇山登山道などがあればベストである。今後、同じような生物誌が発刊されるかどうかは不明であるが、この作業を済ましたデータであれば編集作業は格段に容易である。

また、地域メッシュコードを記録するに当たっては、ベースとなる測地系は世界測地系によるものが一般的となりつつあり、私は今年から世界測地系を採用している。

4 今後

今回の三重県生物誌の発刊に携わっている他の方々はどのようにお考えか分からないが、貝類については、今回の生物誌を追加・修正した続編の発刊をできる限り続けていきたいと私は思っている。

〈なか まさる：伊勢市小俣町1284〉

三重昆虫談話会・秋の調査会のご案内

10月8～9日に鳥羽市筈志島で実施されます。参加希望の方は同会の河北さんに直接お申し込み下さい。詳細は同封のお知らせを参照願います。

三県合同フィールドワークの記録

7月22～23日に大台町大杉で22人の参加により実施。粟谷小屋に宿泊し、1日目は粟谷周辺、2日目は西谷のブナ原生林で観察を行いました。夜は、ランプ灯下で（山小屋なので9時半消灯）、（たぶん）生きものはなしで盛り上がりました（当日の小屋は貸切）。ところで、大台町から参加のMさん（女性）のことで、会のあり方について考えることがありました。彼女は今年から退会の手はずでしたが、事務局の手違いで会報とイベント案内を送付したところ、参加してくれました。植物にご興味があるということで、2日間は植物屋の方々と行動を共にされ、お互いに有意義な情報交換ができたようです。帰り際に、Mさんは退会を撤回され、会員を継続してくれることになりましたが、同じような思い、



物足りなさを感じている会員さんは多いのではと思います。事務局として、会員さんのニーズを吸収する試みもしていかねばと思った2日間でした。



写真1 わが家のリュウビンタイ, 2017年6月30日撮影（本文は4頁）



写真2 ソーラス(孢子囊群), 2017年9月9日撮影（本文は4頁）

会員の本

三重県産蝶類分布表 1957-2016 河本 実・編

A4判, 889頁 2017年7月27日 自刊 定価(7千円)+送料

三重県内での○○(○には好きな生きものを入れてください)についての情報を一覧できる本があれば便利であるとは誰しもが思うところであるが、近年はだれもつくりとしない。時間がかかるうえに、文献の情報をひたすらパソコンに入力するというまったく面白みに欠ける作業をしなければならないからである。環境保全や生物多様性確保を推進するうえで不可欠な情報であることは間違いないのではあるが、県庁の自然保護部署も博物館もやらない。それほどつらい作業なのである。それを河本さんは一人でやってのけた。分布表という書名であるが、県内産蝶の市町別の確認状況と種別の確認データ、文献一覧で構成されている。中心となるのは種別の確認データで、どの蝶がいつ、どこで確認されているかすぐに知ることができる。河本さんの望みは、本書が環境保全に活用されること、さらなるデータの蓄積であろう。蝶好きな方はもちろん自然全般に関心のある人も手元に置くべき一冊である。

購入希望は河本さん(〒510-0812 四日市市西阿倉川950-2 E-mail zephyrus0215@yahoo.co.jp)まで。



編集後記

夏号をお届けします。私の持ちネタも尽きてきましたので皆様のご投稿をよろしくです。次号は12月発行予定です(善)。

自然誌だより113号

発行日 2017年9月25日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp